

にこりこー帯にぎわい会議 検討のまとめ（案）

【総論】

○にこりこー帯は、役割・・・「あるべき姿」の見直しがされていない

平成9年には珍しかった直売所だが、スーパーにも地元の農産物の直売コーナーができ、生産者、買い手にとって選択肢が拡大する中、誰にどんな価値を提供するかという「あるべき姿」の見直しがないうちで運営そのものが目的化され、現場は経営の方向性が分からない中、運営を迫られている。

→一帯を住民が訪れたい理由や、対外的な広告塔としての役割、その意味での道の駅の認定など、農家の所得向上機能に加え、今日的な新しい「あるべき姿」が必要。

○商売を手法として公益を実現することの分かりにくさ

そもそも単価の安い野菜で経営に十分な利益を出す困難さや、周辺に配慮した営業時間、ふるさと納税・学校給食・観光面など町の業務を担いつつの営業の難しさなど特有の事情もあり、町は相応分として指定管理料を支払うものの、公益の成果指標が不明確であり、公益と営業が入り混じった経営的な収支が、適正なのか判断しづらい。

○責任者が不在である

現状は行政と公社という農に関する専門外の関係者による運営の限界や、町が経営に関与し、営業の一部を受け持った経過など、指揮系統、責任体制が不明確な状況であり、経営に失敗してもお金で損をする人（責任者）がいない中、適正な経営の向上が望みにくい。

以上から、現場は健全な向上意欲を持って店舗経営を行いつらい。

→各施設の運営に専門性や実績のある運営主体が経営を担う

経営を運営主体の責任で行い、公益として依頼するものは成果と対価を示す

一帯の施設間・果樹団地を相互に活かした運用ができる駅長

町は基本的に経営に関与しないこと が必要

公社は観光に特化した会社であり、運営主体としてはいかがなものか。

○にこりこー帯には、十分可能性がある

来場者が年間20万人を超えるながたエリアの一角にあり、レストラン・直売所の商業施設としての可能性や加工所の設備、適期を迎える果樹団地に隣接、伊北インターを降りて一つ目という立地、広がる山並み景観など、現在ある資源の活用だけでも、にぎわう可能性は十分にあると思われる。

○一帯の「あるべき姿」(コンセプト)

当初の農家の所得向上という機能に加えて・・・

→町民が行きたくなる場所

町民の皆さんに喜んでもらえる、使ってもらえる場所でなければ、外からも人は来ない。そうすることで、町外、県外の皆さんからも親しまれる、楽しむことができる場所になる。

一帯は町の施設であり、あの施設を町で運用する理由や価値が必要。場所柄町外者に向けた機能も必要だが、経営を成り立たせるのは町民の日常的な利用。

→箕輪の農の作る価値を伝え、楽しむことができる場

- ・大切にしたい「農」の価値を伝えたい
- ・スーパーとは異なる訪れたい価値の提供
- ・地産地消の推進の場 軽トラ市、農の朝市（規格外のものも可）
- ・農を生かした箕輪の暮らし方、楽しみ方の提案ができれば
- ・農業の地方創生 という切り口
- ・情報発信の場
- ・ながた自然公園一帯と連携して、温泉、自然公園、キャンプ、宿泊を提供
- ・都会へ出て行った人に町に戻ってきてもらうときに町の PR を行うツール
- ・上伊那における当町の差別化

一帯のあるべき姿

→町民が行きたくなる場所

→箕輪の農の作る価値を伝え、楽しむことができる場

⇒町民が欲しい「もの・こと・場所・暮らし・時間・機能」が手に入れられる
「地消地産」という切り口

○運営主体について

店の方向性をリーダーが示す、リーダーシップが必要。「何をやるか」「誰がやるか」をはっきりしてからの方がいい。

責任者がいない。責任者とは、失敗するとお金で損をする人のこと。

失敗しても、努力しなくてもつぶれない。それが一番おかしい。売れても売れなくても給料が出て雇用が守られる。「責任者が必要」。根本的に、にこりこがなくなって、困る人がいない。官民によらず、「やる気のある人」

3施設を指揮する駅長、給料もそれなりに出し、成果主義で考えてはどうか。

果樹団地の話は、JAなしにはできない。

- ・ 公社がすべて請け負う体制をやめ、基本的に建物と土地の管理を公社が請け負い、各施設は建物に「テナント」を募集する。
- ・ 町が公益として依頼したいものは個別に費用を算定し、成果基準を明確にし、テナントと個別契約にする。
- ・ 一帯として連携して運営するのであれば、駅長を募集する。
- ・ 町内 8 割の農家が会員であり、八乙女共撰所、果樹団地の運営に関わる JA との協力関係をつくる
- ・ 振興公社の経営の責任と自由度を上げるため、現在 8 割町が出資する資本金の資本比率を引き下げるとともに、町長・副町長は経営幹部を退く。

【施設別の協議及び提言】

- ・ 町民が行きたくなる
- ・ 箕輪の農のつくる価値を伝え、楽しむことが出来る という一帯のあるべき姿を実現するために、各施設はどんな場所になったらいいか？

○農産物直売所 にこりこ

直売所の強み・期待は 新鮮・市価よりも安い・品揃え

わざわざ行く理由は、スーパーにない対面販売、生産者との関係が持てること
ありたい姿を実現するのはどんな店か

- ・ 旬の食材を知ることができる
- ・ 安心である（生産履歴・・・）
- ・ 顔の見える販売＝生産者とのコミュニケーション
- ・ そこに行くと生産者ならではの情報を知ることができる。
- ・ その土地の珍しい物がある、という期待に応える
- ・ 農産物の試食やながた荘・レストランで味わったものの販売がされている
- ・ 営業がいる、販売員の裁量がある
- ・ 食べたいものが手に入る。生産者をつないでくれる
- ・ 地産地消を町内で進められる、町内産農産物を扱っている
- ・ 販売量が確保され、生産者が出荷したくなる

→利益を前提とした「経営」が営まれる直売所であり、販売量が増えることで、町民を始めとしたお客様のにぎわいと、生産者の持ち込み量が確保されている。商品知識豊富な店員がいて、町内産の農産物の価値（旬・安心・食べ方などの情報）を知ることができ、箕輪の土地で育った食べ物を買いたい理由を作る。こんなものが欲しい、というお客様のニーズと生産者を結ぶ。軽トラ市や朝市など、訪れる人が生産者と直接出会える。

○加工所

惣菜、パン、もち、ジャムなど様々なものを作る設備と製造許可を保有する。少量の加工特にクーボを使ったジャム製造など、果樹団地との連携にも期待。ありたい姿を実現するのはどんな加工所か

- ・小ロットであっても自家消費以上に採れたものを加工できる
- ・加工所で何が出来るのか、町民に知ってもらい、使ってもらう
- ・直売所の材料を使う。レストラン、直売所と連携している。
- ・果樹団地に隣接する立地を活かした、オリジナル商品がある
- ・起業したい人に向けて貸す（ぱん・ジャム・餅など、製造許可を活かす）
- ・レストラン向けの加工エリア、テナント利用エリア、体験エリア等、加工所の中を区分けして活用し、稼働率を上げ、製造原価を考えていく。
- ・営業がいる
- ・販路がない→受託製造を安定して得れば販路は考えなくてもよい
- ・学校給食で活かす（注文量に応えられる材料、調整できる人がいる）

→町民の利用をすすめ、地産地消が進むことを目指して加工所びらきを行う。季節的に取れすぎる・自家消費以上にできる農産物を町民から受託加工し、加工品にすることで捨てずに楽しむことや、学校給食、特に中部小・中学校といった大規模校の一次加工、果樹団地に隣接するメリットを生かした商品開発、上伊那地域にないジュース加工場としての整備、複数ある製造免許と設備を活かした起業支援の場など、加工所の施設と設備を最大限に利用していく。

○農家レストラン たべりこ

公設民営が一番可能な施設と思われる。観光資源である「赤そば」を食べられる場所を提供しつつ、周辺飲食店への影響に配慮し、昼のみの営業という考え方で始めている

ありたい姿を実現するのはどんなレストランか

<メニュー>

- ・加工所・直売所取扱い品との連携・活用（町内産の農産物を使ってほしい）
- ・周りの畑や果樹など、風景とリンクしたメニュー「景色を食べる」
- ・バイキング方式はロスが大きい。定食・そばなど一品メニューに見直し
- ・お茶の時間帯で軽食メニューの導入
- ・子どもが行きたくなるメニューの充実（カレー等）
- ・地元の人が日々使えるメニュー・価格に内容見直し（店舗の位置付け）
- ・美味しいのはそば。そばを売り（主体）としてメニューの組み直し
- ・食べ放題としているため、単価の高い赤そばの価値が伝わらない

<営業時間>

- ・営業時間は昼だけでなく朝食、夕食も提供できれば。地元が来れるのは夕方
- ・周辺の飲食店に配慮というが、相乗効果もある
- ・居られる・集まれるスペースや軽食提供としての機能も考えて時間延長を
＜その他＞
- ・やる気のある、やりたい人にやってもらいたい、設備・環境は素晴らしい

→町の農産物の美味しさを伝える、という本来の目的に沿った運営が望まれる。メニューはロスの多いバイキング方式から一品メニューにし、地元の人が日々使える・行きたくなるメニューへの見直しや周辺の果樹団地の旬に合わせた軽食の提供、それに合わせた営業時間の変更を検討する。

○果樹団地

JA上伊那がにこりこ周辺で、平成22年度から果樹の収穫体験ができる観光農園の整備を進め、果樹やアスパラ等が適期になっている。

ありたい姿を実現するのはどんな果樹団地か

- ・オーナー制。収穫だけでなく何度も足を運ぶ理由に。成長過程を見てもらう
- ・体験カレンダーを作り、お米・野菜・観光資源も組合せて一覧で提供する。
- ・子どもに配慮した棚の高さ
- ・「収穫」と「食べること」をセットで経験出来たら。
- ・観光旅行会社と合せて集客してはいかが。
- ・現在の園主との協力
- ・果樹団地の看板整備

→果樹・野菜の収穫体験を基本として、隣接する加工所を活かし、加工体験とセットにして楽しんでいただくことや、観光資源とセットにした体験カレンダーの作成により、通年体験を楽しんでいただける観光農園の開発を行う。

○追加して整備するモノ・コト

一帯は農家の所得向上という機能に加え、箕輪の農の作る価値を伝え楽しむことができる場として、町民に愛され利用されることが求められる。

ありたい姿を実現するために、必要な整備

- ・ハードを作るのではなく、ソフトを作る方がいい。中身の充実が先。
- ・整備を行うなら、トータルでデザインしブランディングできるように
- ・居られる・集まれる場所
田舎のライフスタイルを楽しめる、公園的なスペース
日陰、ほっとする場所（植樹）、眺望を生かして眺める場所、森のような場所
- ・遊歩道、遊具、花畑 子ども、高齢者、福祉という観点から

福祉施設入所者等の散歩のニーズなど

・既存の機能を強化するもの

看板 何屋かわからないため

アーケード 施設間のお客さんの対流、売り場面積の拡張、休憩場所、
営業していることが一目でわかる

景観 電柱の地中化による山並み景観の向上。農道沿いのビューポイントは近隣にない。

作業場所 にこりこ、加工所のバックヤードが狭く、作業場所の拡張

駐車場 北側砂利敷きの舗装

外用トイレ 店舗内にしかトイレがない為、利用者の立ち寄りの誘導のため
(大型観光バスに対応するとすれば、大型用駐車場・たべりこの席数増も)

○道の駅の要否について

町民が行きたくなる・箕輪の農の作る価値を伝え、楽しむことができるというにこりこ一帯で提供したい価値に照らして、道の駅をどう考えるか。

(追加整備で必要なのは、24Hトイレ、駐車場、情報提供施設、看板)

道の駅は必要という考え方

- ・町のブランドづくりのために
- ・また「道の駅」として期待されるレベルまで現状を改善する理由になる
- ・いずれにせよ、トイレ・情報発信施設は必要。すると結局道の駅の要件を満たしてしまうので、それならば取得しては。
- ・道の駅になることでナビで案内され、町名以上の明確なランドマークに。
- ・集客が見込まれ、出荷する農家のためにもなる。
- ・南箕輪を始め近隣でも建設予定。同じ道の駅なら、特徴を出して連携する。

道の駅は必要ない、という考え方

- ・上伊那でも最後の方であり、他がやっているからやる、というのではダメ。
- ・知名度を上げるのであれば、道の駅にこだわる必要はない。
- ・まずは、中身をよくするべきで、財政的にも、多額の費用を割いて作る必要があると言えるか、疑問（そもそもリニューアル自体に、それほどお金をかけるべきではない）。
- ・道の駅として来場者が持つイメージに比べられるものでないと、かえって悪印象
- ・夜間エンジンをかけたトラック駐留、たまり場化、治安の悪化
- ・24時間使用可能なトイレ、情報発信施設、駐車場などの管理コスト